

東京の橋

下町の誌上橋めぐり

浜離宮と南門橋・山口文象

日本大学工学部社会交通工学科 教授
(文化審議会専門委員)

伊東 孝

古川から東京湾にでて取舵をとった釣舟は、レインボーブリッジを右そして後に見ながら、隅田川へと向かう。左手に竹芝棧橋を見る。正式名称を竹芝埠頭といい、竹芝棧橋は通称だ。三宅島や八丈島などの伊豆諸島や、父島・母島の小笠原諸島まで向かう船が発着する。現在は再開発され2層の客船ターミナル「ニューピア竹芝」となり、マストをシンボルにした竹芝埠頭公園もつくられている。若者の間で、オシャレなデートスポットになっている。

隣は浜離宮だ。しかし舟から浜離宮を望むこと

ができない。見えるのはコンクリートの防潮堤護岸のむこうに「汐留シオサイト」の高層ビル群である。浜離宮は、防潮堤の間に設けられた水門の隙間からのぞき見できるぐらいである。それでも浜離宮は、江戸の庭園文化を代表するので、少し説明を加えたい。

1 浜離宮

現在、六義園・後楽園とともに、江戸の3大名園として知られる浜離宮は、江戸時代は「浜御殿」と呼ばれ、江戸城の「出城」の機能を有していた。



東京湾への視野を妨げる防潮堤護岸
防潮堤護岸の間から水上バスがはいてくる。



明治維新後、皇室の離宮となり、「浜離宮」と呼ばれる。戦後の昭和20年11月、東京都に下賜され、浜離宮恩賜庭園となった。一般公開は、翌年の4月。浜離宮は、潮入り庭園として有名である。「潮入り庭園」とは、園池に海水を引き込み、潮の満ち引きによって変わる庭園の趣を楽しむ庭園様式のこと、江戸時代に考案されたという。東京湾を控える江戸では、旧芝離宮恩賜庭園、清澄庭園、旧安田庭園なども潮入り庭園だったが、現在、実際に潮が出入りしているのは浜離宮のみと思っていた。しかし今回、写真撮影をお願いしている加藤豊氏によると、浜離宮も潮の出入りはなくなったとのことである。東京湾と接しているのに、なぜか。加藤氏は、理由も確認してくれた。満潮時に台風がきたとき、池の中の橋が水没したため、以来、コンピュータ制御で水位を一定にしているというのだ。だとすれば、ふだんは潮の干満にまかせ、ある水位を超えるとのみ、水門を閉じることできるはずだ。干満の水位差2mによる水景の変化、庭園の水景復元が浜離宮の課題だ。

歴史学者の西山松之助氏によれば、江戸の作庭は、平安時代のルネッサンスという。「中世の名園は多く枯山水の石組庭園を主流としたが、近世には、江戸のみならず、京都の桂離宮・修学院離

宮をはじめ、金沢の兼六園、高松の栗林公園など、すべて広大な池を設け、舟中にて管弦の雅遊を催し、庭内に多数の名勝絶景を築造し、それを王朝の歌や名所に見立てた王朝思慕の貴族趣味を特色としている。その意味で、近世の名園は中世の造庭を否定し、もう一時代前の王朝のリバイバルだといえよう。」(西山松之助他『江戸学事典』弘文堂)

かつて東京湾を望めた浜離宮であるが、今では舟から浜離宮が見えないように、浜離宮からも東京湾を望むことができない(前頁写真)。今日、浜離宮を歩くとどんな光景が展開するのか。汐留シオサイトの高層ビル群が、前述した2層デッキの「ニューピア竹芝」以上に浜離宮の借景を様変わりさせているのである(下の写真)。かつては空間的に奥行きがあり、広々とした浜離宮は、今ではビルに囲まれ、景観心理的な見え方としては小さくなってしまった。浜離宮の庭園空間の質が変わったといえる。これを、「都市的風景」として評価する人もいるようだが、このような状況が出現したからこそ、平成16年に景観法が、昨年は歴史まちづくり法が制定されたのかも知れない。

2 南門橋

浜離宮にかかる南門橋について触れておきたい(橋



浜離宮の景観
迫る汐留シオサイトの高層ビル群

名の読み方は、「みなみもんばし」とも読めるが、正式には「なんもんばし」である。コースの都合上、橋めぐりではめぐれないが、クラシック・スタイルの華やかさのある橋だ。浜離宮へのアプローチ橋で、水上バスの浜離宮発着場の奥に位置する。現在の橋は、震災復興事業でつくられ、大正15年1月に完成した(下の写真)。

● 凹型意匠のリング石

南門橋は二連のコンクリート・アーチ橋だが、御影石に入念な意匠細工を施し、離宮へのアプローチ橋としての華やかさを演出している。まず高欄壁石。笠石部・壁石上部・下部の3つの部分より構成される。高欄笠石(手摺石)の下の外壁面は石の角を細かく出し、下に小アーチを連続させる。しかもアーチの削り面を斜めにし、高欄壁石との

連続性を保ち、その下の奥まったアーチ壁面(スパンドレル)へと続く。

これらスパンドレルから笠石までの壁面構成は注意して見ればふつうに気づくが、南門橋の意匠のこだわりはこれに留まらない。

アーチのリング石にも注目したい。リング石の上下両端部の縁取りを突出させ、間の表面部分を沈ませているのである。このような石の細工を気づかせてくれたのは、10年ぐらい前に大橋英樹・藤川崇両君のまとめた卒業研究であった。はじめて聞いたときは信じられず、念を押して聞いた。なぜかといえば、リング石はスパンドレルの石より少し突出させ、大きめの石を使うのが常識だからだ。このほうが見た目の安定感を得られる。典型的なのが日本橋の石組みである。

南門橋と日本橋とのリング石の違いを、石の断

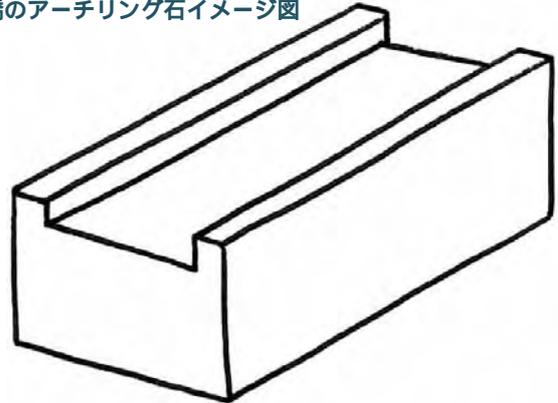


面で図式的にみると、まさしく凹と凸の字の相違にある。凹と凸の字の真ん中部分を横に引き伸ばした形を想像していただけるとよいと思う（図表(a)）。日本橋のように、縁周りを少し削って石の表面部分を突出させたのを、江戸切石仕上げ（図表(b)）というが、南門橋のように縁を突出させて石の表面部分を凹ませた切石仕上げの名称は、寡聞にして知らない。凹にしろ、凸にしろ、なぜこのような仕上げをおこなうのか。表面に凹凸ができ、陰影ができて構造物に表情が生まれるからだ、と思う。だが凹面仕上げの石は、いままであまり見たことがない。それにこのような仕上げは、石にとって得策ではない。縁の出っ張りが欠けやすくなるからだ。石の節理をあまり気にせず、機械で切石加工する現代では、このような意匠は絶対といってよいくらい採用しない。

● 山口文象が嫌った意匠

南門橋の意匠を考えたのは、誰であろうか。建築とちがい土木構造物には、設計者のわからないものが多い。最近土木学会でも、土木構造物の無名性が話題になった。例えば昨年の土木の日の記念行事シンポジウムでは、「匿名性からの脱却」と題してパネルディスカッションがおこなわれた。土木の匿名性の原因のひとつは、震災復興橋梁のマスタープランを考えた復興局橋梁課長の田中豊（後、東大教授）にあるとわたしは考えている（詳細は拙稿「田中豊と鉄道省の仲間たち」『江戸・東京を造った人々1』を参照）。しかし南門橋は、肝心の橋の設計者はわからないが、意匠設計の判明している数少ない橋のひとつである。建築家の岡本蚊象（後の山口文象。以後、「山口文象」という）が意匠設計を手がけた。

図表(a) 南門橋のアーチリング石イメージ図



(b) 江戸切石仕上げのイメージ図



南門橋

キーストーン（アーチ頂部の要石）には橋側灯がついていた。

建築家山口文象は、モダニズム建築や和風建築の名手であるとともに、土木施設のデザインも手がけた異色の建築家として知られる。彼が土木施設のデザインを手がけるきっかけは、震災復興橋梁が初めてである。土木施設のデザインに建築家が協力したことは、近代では皇居正門石橋の河合浩蔵（設計は久米民之助）や日本橋の妻木頼黄（設計は米元晋一、樺島正義）などの事例が知られているが、山口の本領が発揮されたのは、黒部川第二発電所と目黒橋、そして上流部にある小屋平ダムと沈砂池の土木デザインにみられる。近代では、発電所のデザインにかかわったデザイナーとして、木曾川の発電所群を手がけた佐藤四郎らがいるが、山口のようにダムと沈砂池まで設計した建築家は稀である。これらは後年の話だが、震災復興橋梁に関わった山口文象の若いころ（22歳ごろ）は、主に橋梁設計者から装飾のイメージを指示され、その枠内で意匠設計をしていたとわたしは今まで理解していたが、もっと積極的に土木デザインの設計にもかかわっていたというコメントを見つけた。

「山口の話では、清洲橋の橋げたとそこからはねだす歩道部分の構造について、その見かけを薄く見せるデザインに腐心した」（『ウィキペディア（Wikipedia）』）

現代的で機能的な造形をめざした山口にとって、古典様式の南門橋の意匠は不満であった。これについては、『東京の橋』（鹿島出版会）でふれたことがあるが、要点を再録してみる。

橋梁課長の田中豊は、南門橋のデザインについてある時、山口に次のようにいった。

「今度はモダンでなくて、あそこは離宮なんだから、とにかく様式的なものをやってくれ」

これは山口の言い方だが、田中の発言として理解すると、次のようなことまで思わず推測してしまう。

「今度はモダンではなくて」これは、南門橋の意匠を手がける前に、すでにモダンな意匠で設計した橋があることがわかる。後で述べる数寄屋橋だったのだろうか。しかし数寄屋橋の竣工は昭和4年、

南門橋が大正15年なので、時間的な順序があわない。

「離宮なんだから、とにかく様式的なものをやってくれ」田中は山口がモダンな様式を好み、「少しぐらい」といっただけではモダン調になると考え、「とにかく様式的なもの」と念を押したにちがいない。田中と山口は、以前にある橋をめぐる“モダン”と“様式的”とで侃々諤々の議論があったのかも知れない。

彼は当時、橋の装飾やデザインについてどのように考えていたのか。雑誌『工芸時代』の昭和2年5月号に、山口は「橋梁を語る」という小論を掲載している。時期的には震災復興事業の真っ最中であったが、山口自身は復興局を辞め、石本喜久治と一緒に仕事をしているところである。

彼は震災復興橋梁について、2つの観点から批判している。まず、親柱である。どの橋も大きな親柱をつけ、橋の中心がまるで親柱にあるかのようにつくられている。しかも装飾を付け加えることで多大な費用をかける。なんのために親柱を立て、飾り付けをしなければならないのか。

南門橋にはゆったりとしたバルコニー的な橋詰はとられたが、大きな親柱はない。意匠は様式的にしたが、大きな親柱は設置しなかった。山口の強い主張がここに表れている。

次は、装飾と美との関係である。濱田敦の『塔と橋』を引用して批判している。

美的要求とは、必ずしも装飾の付加を意味するものではない。構造的に無用なる装飾を付加することは、多くの場合無用のことだ。よけいな彫像や装飾は橋梁の美を破壊することすらあるのだ。

石材の仕上げのように、近寄って見ないとわからぬような部分に費用をかけることは無用である。

先にコメントした南門橋の意匠的特徴は、まさしく「近寄って見て」はじめてわかるディテールである。山口が批判し、嫌った意匠に、わたしは感動していたことになる。

それでは山口が気に入った震災復興橋梁のデザインは何橋だったのでしょうか。それは、「君の

名は」の舞台にもなった数寄屋橋である。数寄屋橋は、模型が分離派建築会第5回展に出品され、自他ともに許した代表作として知られる。数寄屋橋は東京オリンピックの高架道路の建設にあわせて取り壊されたが、竣工当時の写真などから特徴を探ると、次のようにいえる。

橋は、装飾のない石積みだが、構造部ごとに凹凸がつけられて分節化され、作り出された陰影が橋の立体感を効果的に醸し出している。真ん中の橋脚は、アーチより突出させ、高欄壁は、さらにグッと張り出す。高欄笠石と橋脚の隅角部は丸くなめらかだ。装飾は一切おこなわず、当時都市内の人通りの多い中小橋梁には必ずつくられた親柱も省き、高欄壁と一体化させている(下の写真)。数寄屋橋公園には、親柱に代わる高欄端部の留め石が残されている。石の素材は、薄いピンク色をした桜御

影で、素材自体に華があった。

南門橋と数寄屋橋との相違を整理すると、空間構成の凹凸によって橋梁本体と高欄とを印象づける数寄屋橋と、装飾意匠でその(違)いを演出した南門橋ということができる。南門橋は、壁面のディテールには凹凸がみられたが、マッサとしての表現には欠けていた。では南門橋を、数寄屋橋のようにマッサとして凹凸を強調して意匠を付けたら、どうなったであろうか。想像してほしい。もし仮に、現在の南門橋のように意匠をつけたとすれば、表現や表情がくどくなっていたにちがいない。華やかさという面では、ともに共通性がみられた。一方は素材の色に、一方は装飾意匠にみることができた。

(写真：加藤 豊)

(注)彫刻・建築作品等において、全体の中で1つのまとまりとして把握される部分

かつての数寄屋橋

マッサで橋の空間を分節化し、構造体を表現する。

